2003年度 修了

小学校でのグループプログラムにおける教室内の相互作用過程と気付き
―学校における第3者の役割に注目して―

立命館大学応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会行動クラスター

都市化の影響による子どもを取り巻く環境の変化により、子どものコミュニケーションスキルは大きく低下した。また学校と言う「場」が持つ課題も見られる。たとえば学校の＜試すー当てる＞を基調とした貧しいコミュニケーション（浜田､2003）や、競争的他者観（守屋、2000）が挙げられる。

また岡堂(1998)は、システム自体の構造改革が必要なときには、システム外からの適切な介入によってシステムを変革する第２次変化が必要であるとしている。しかし、学校における第３者は現在周辺部にとどまり、システムの変革には至っていない。今後学校システムに第３者がどう関わっていくかはこれからの課題になると考えられる。そして現在学校に関わる第３者として、学校心理学、学校臨床心理学、臨床心理学（スクールカウンセラー）と言った様々な領域の援助活動が展開されている。また、子どものコミュニケーションを促進する動きもピア・サポートやストレスマネジメント、構成的エンカウンターと様々な取り組みがなされ、学校でも徐々に取り入れられている。

しかしそれらは、学校の中で単独の取り組みで行われていることが多く、その背景には学校を援助する専門家の対立があると考えられる。また、援助される側である子どもの変化は記述されているが、それに伴って変化する教師や第３者の関わりが不鮮明である。それでは、「作用するもの -されるもの」と言う従来のあり方は変化しないといえる。

以上のことから、①コミュニケーションスキルのグループプログラムの実施を通じて児童の相互作用を可視化させ、学級風土の向上を目指す。②コミュニケーションに関わる人物として児童、教師、第３者の３者による対象の視点からコミュニケーションプロセスを検討する。③これらを通じて第３者が学校に果たす役割について考察することを目的として挙げた。

研究デザインとしては､小学校６年生の児童に対して10回のコミュニケーションスキル向上のプログラムを行った。そして、プログラムのゴールは個人として児童自身のジェンダー観や怒り・いじめ体験を表出することで異なる感じ方を理解し、新たな他者観や・視野を獲得する事、またコミュニケーションスキルが要求される場面において対応可能な視野を広げることをゴールとした。その結果、聞き方・話し方・ジェンダーアンガーマネジメント･いじめの認知が下位テーマに選んだ。プログラムの評価としては学級風土尺度（伊藤、2001）と学校生活アンケート（いじめ状況）（冨永､1999）を使用した。対象児童は郊外の公立小学校の６年生全体、１組35名（男子19名　女子16名）２組37名（男子17名　女子20名）の計72名である。

結果として、査定結果では学級への満足感が両学級とも「すこしはい」から「かなりはい」に変化（１組1.7点：SD1.6→2.2点：SD1.5、２組1.9点：SD1.4→2.6点：SD0.9）した。いじめの変化は、１組では「殴ったりけられたりした」の被害（プレ８人：24%→ポ

スト２人：６％）が２割近く減少し、第３者の見聞（プレ８人：21%→ポスト４人：12%）も１割近く減った。２組では被害としては「『仲間はずれ』にされたり、みんなから無視されたりした」（プレ 15 人：41%→ポスト８人：22%）が２割近く減少した。また「いやなあだ名で呼ばれた」（プレ 18 人：53%→ポスト７人：36%）も２割近く減少した。また、質的変化としても、初期の頃にサブグループにおいて話し合いが困難であったのが、終結時にはサブグループが構造化され、児童のコミュニケーション量が増した。上記のような結果となった背景には以下のことが考えられる。まずプログラム実施中において児童間同士でサブグループ内に自らの位置づけや、自己開示の度合についての探索行動や葛藤が見られた。そして、児童同士の話し合いによる価値観の違いや齟齬から無意識の「思いこみ」が可視化された。また、それに伴う視野の広がりにより新たな「他者観」（守屋、2000）が立ち現れて来たと考えられる。また学校文化の中に日常的に見られる「評価する -される」とは違う視点を持った第３者が入り込むことは、児童にとっては価値の相対化が起こったと考えられる。また、教師集団にとっても、子どもを客観的に観察する機会は新たな気付きをもたらし、第３者と児童のニーズに合ったプログラムを作り挙げていく過程の中で、これまでとは違った視点で児童を見ることが出きるようになったと考えられる。以上のことから第３者が学校に入っていく際には、「違う視点で共に関わる姿勢」が必要であると考えられる。